

茶の湯文化学会会報 No.71

第71号 / 2011年12月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第三十三回研究会報告

中田孝一
岩田克美

「第三十三回研究訪中国に参加して」

中田孝一

お茶を習い始めて日の浅い私ですが、十月十五〜十九日の研究旅行に参加しましたので報告いたします。

今回の研究会は中国江西省北部にある廬山と景德鎮を巡る旅である。東京十名、大阪九名の参加者が上海浦東空港に集合。さらに乗り換えて江西省の省都・南昌に着いたのは日が変わる寸前の深夜であった。

二日目。夜が明けて初めて眺める南昌市。人口四三〇万人の江西省の省都。ビルが林立する市の中心部があるかと思えば、工事中のビルや道路も多くその周囲にはまだ古い住居がある。やがてその地区も開発され取り壊しの運命にあるのだろう。経済成長著しい中国の風景でもある。今回の旅の最初に訪れたのは南昌市中心部にある「江西省博物館」。まずはその現代的な建物に驚く。一九九九年にオープンし、江西省の古代から現代までの歴史を展示する。一〇万余点の文物が保管され、その古代から陶磁器は圧巻である。代表的な陶磁器の説明を今回の旅の案内役である宋小凡さんから聞く。私は今年二月の雲南省の旅でもお世話になったが、宋さんは単なる通訳・ガイドを超えて陶磁

器に関する造詣は専門家も顔負けである。陶磁器以外のことでは、江西省は一万年前に稲作をしていた証拠となる遺跡がみつかったこと、客家のルーツであることなど興味深いことを知った。午後はバスで約二時間かけて世界遺産である廬山に向かう。廬山は『書経』や『史記』などにも記され、道教・仏教・儒教などにゆかりの深い山。白居易、李白、蘇軾などの多くの文人や学者らが廬山を遊歴・隠棲したという。途中、廬山特有の岩肌の見える場所でバスを止め、一旦バスを降りたその場所で宋さんが李白の『廬山の瀑布を望む』を中国語で朗読してくれた。一気に時空を超えて李白の時代へとワープした気分が最高、とても印象に残った。

さらに廬山の麓にある「白鹿洞書院」に立ち寄る。九世紀初めに建立され、北宋の時代には中国四大書院として数えられ、朱熹（しゅき）により朱子学の拠点となった。そして宿泊場所である廬山山頂付近にあるホテル「西湖賓館」に到着したのは夕陽迫る時であった。

三日目。朝起きるとホテルの前には湖が広がる。名は「如琴湖」。ダムを造ってできた人工湖。早朝の散

策に出かける。海外を旅する時には歩いて街の空気を吸うことにしている。山の並木道を抜けると「あつた!あつた!」朝から賑わう街の中心部。お目当ての「市場」を発見。住民の日常生活があふれている場所だ。どこに行っても食材が豊富な中国には感心する。「如琴湖」の畔を歩きながら宋さんの説明は益々冴える。花径公園、白居易草堂などを散策。さらにその先にあるのが「錦繡谷」(きんしゅうこく)。断崖絶壁の小径をゆっくりと進んでいくとパツと広がった景色は圧巻である。廬山は一年のうち二百日は霧が発生すると言ふ。そこで育つお茶は雲霧茶として有名。私たちはその麓にある茶園を訪ねた。茶畑を視察し、工場で製茶の工程の説明を受ける。茶園を後にして浄土宗発祥の「東林寺」へ。「虎溪三笑」の逸話が有名。「東林寺」から香炉峰を眺める。ここでも宋さんが白居易の有名な漢詩を中国語で朗読してくれた。廬山を後にして、いよいよ景德鎮に向かう(バスで三時間)。この日の夕食は景德鎮陶芸学院の曹建文教授と共に。曹先生が持参された陶片。いつでも焼かれた陶器なのかを調べるのに役立つそうだが、それだけでなく陶片そのものが美しいと思う。

「南昌・廬山・景德鎮 門外漢のつぶやき」

岩田克美

上海経由で南昌に着くと、もう夜中。ビルを縁取るネオン管や川岸のライトアップが華やかに映る。夜景は、その地の人達の生き方と行政の関わりを映すようで興味深い。南昌は江西省の大地方都市。地方都市は、中国内外の大都市を本手に街作りを進めているはずだが、中国らしさ・ご当地らしさとの混濁具合や、精一杯背伸びした志と現実とのギャップが、街の表情を作り上げているのだろう。夜景では雑多が省略され、表情の輪郭がくつきり見えるようだ。

翌日、南昌での見学は博物館をひとつ見て、早々に廬山へ向けて出発。

山麓を往く道すがら南香炉峰を眺め、白鹿洞書院を見学後、入山。九十九折の道を山頂まで駆け上がる。山頂付近に広がる街の規模は予想外に大きい。例えば軽井沢のように、高級保養地として発展してきたのか。日暮れに到着した宿は、街から若干降りた如琴湖畔の、山荘然としたホテル。山と湖の冷気が心地よい。

さて、恒例の買い物散歩だ。バスで降りてきた坂道を二十分ほど登る。旅行の楽しみの

四日目。今回の旅の主目的の一つ「景德鎮国際陶磁器博覧会」の開幕式に参加した。盛大なセレモニーにビックリ。この博覧会ではたくさんさんの陶磁器の逸品が並び、国際レベルで陶磁器の文化交流と取引が行なわれる。博覧会場を後にして、次に向かったのは街の中にある陶磁器製造工場。景德鎮では二十以上の陶磁器工場があり、宋さんの話では約十七万人の市民が陶磁器製造にたずさわっているそう。明・清の時代に最盛期を迎えヨーロッパ、アフリカへも輸出。宋さんが話してくれた次の話しがとても興味深い。それは景德鎮で製作された陶器が輸出されていくと一体いくら(価格)になったのか、と言うお話。景德鎮をひとつとした場合。広州に運んで二〇倍。広州から船に乗せて日本・フィリピン・マラッカ・韓国に行き二二〇倍。ペルシャ・インドで四〇〇倍。ヨーロッパに到達すると一〇〇〇倍以上。イギリスに至っては四〇〇〇倍になったと言う。当時の航海のリスクを考えるとこれぐらいの利潤が必要だったのだろう。ヨーロッパではまさに宝物であったのだ。

絵付けの工程を見学。景德鎮特有の紋様を丁寧に書き込んで行く。あれだけの細かい幾何学模様や動植物の精密画。なにか特別な方

一つは、普通の店での買い物。ちゃんと通じないまでも中国語会話で。地元のお酒を晩酌用に仕入れるわけだが、売り場のおばさんは『日本人なんですよー』『あーそうかい』の遣り取りの後でも容赦せず喋りかけてくる。

翌日の午前中は、徒歩で、湖畔の花径公園から白居易草堂。断崖絶壁の超絶景スポットで集合写真。昼食は有力者の別荘風の廬山賓館。古色蒼然のロビーの写真には、共產党関連のエポックがぎっしり。午後は東林寺、茶工場の見学の後、高速道路で一路景德鎮へ。

さすが景德鎮!料金所の柱が景德鎮じやないか!市内の大通りに並ぶ街灯も、通り毎に意匠の異なったそれだし、交通信号や歩道橋の柱までも。中央の公園に聳える意味不明の『うさぎ』オブジェは、無数の小皿で。



景德鎮の街角



景德鎮の工房

法があるのだろうかと思う(思いたい)のだが、マジックはない。あくまで手でコツコツと描きあげていく。製陶工場見学後、街の中心にある「龍珠閣」へ。かつて明と清の時代の官営陶磁器工場であった。小高い場所に建っているのが、なんと地面の下は投棄した陶磁器の破片だそう。龍珠閣の横にある古窯遺跡。もともと住宅が建っていたのだが、街の再開発で掘り起こしたら出土した遺跡。こんなのが街のいたるところにあるのが景德鎮なんだろう。

これまで江西省は私にとってあまり縁のない未知な省でしたが、古代から中国南北の交通の要であることを知った。特に廬山は陸路と水運が交叉する地に位置し、経済が文化を育て、文化がその地を豊かにしていったのだろう。お茶にまつわる生活史、文物、陶器など、お茶文化は多岐にわたるししかも奥深い。おそらく終わりなきテーマ。この茶の湯文化の旅はずっと続けていたきたい、そして参加して行きたいと思いました。最後に旅の企画をしていただいた役員の皆様、現地案内人の宋さん、旅行者の遠藤さん・八島さんに感謝いたします。

翌日のイベント(国際陶磁器博覧会)には、開幕式に列席。何故開幕式まで?と思っていたら、これがメッチャ面白い。娯楽としてはなく、色々しつくりこないことの配列が絶妙。南昌の夜景を見た時とも一脈通じる感じ。

会場は屋外で広大、一万人くらい。大混雑のセキユリテイグートを見ると、鼓笛隊のお出迎え。。。えっ?衣装は若いのが平均年齢六十歳か?混乱の末、外国人エリア(?)に誘導され着席。周辺のステージには二〇〇人くらい子供合唱隊が並んで若干緊張気味。前半は、スター歌手(?)と子供合唱隊の競演。後半は、延々と祝辞や挨拶が述べられるセレモニー。党とか、何某首長・何某委員長などはアピールし処なんでしょうね。会場との温度差が広がっていく。ところで陶磁器に興味なさそうな大勢の観客は何故?あの歌手たちが超人気者とも思えないし。。。ああそうか!子供合唱隊とか、特に何もしていない会場係・コンパニオンとか、過剰気味のスタッフの家族・知人を間接的に動員してるんだ。花火・紙吹雪・鳩で、華やかに開幕。イベントの内容に関係なく『開幕式はこういうもの』という構成だね。

午前中はイベントの展示、午後は景德鎮の

製作工程十シヨッピングや民衆博物館・御器廟遺跡など陶磁器三昧。予定した場所全ては見学できなかったが、その原因となったのは交通渋滞。ともかく自動車が増えている、各自治体共通の大問題とのこと。学校の下校時刻に当たってしまい、親が自動車で迎えに来ている。バイクも廃れておらず、三人乗りも多い。車窓から見るお迎え風景が、国や地方で微妙に違うのは面白い。旅先で見たバイク五人乗りについて、大連出身の添乗員さんと話が弾む。日も暮れてきて、上海経由の帰途へ。



「小堀遠州 不要となった橋杭で花器を作り…」

米村孝月

小堀遠州（一五七九—一六四七）は、本名を政一と言い、武將として豊臣秀吉・徳川家康に仕えました。慶長十三年（一六〇八）に遠江守（とおとうみのかみ）を拝命してからは、通称遠州の名で呼ばれました。

遠州は、伏見奉行であると共に作事奉行として、京都や大阪の人々に親しく接しました。特に、作事奉行としての遠州は茶人として、師である古田織部を通して千利休の教えを守り、利休の孫である宗旦の侘茶とは異なる大名として独自の茶の道を創始し、たことで、今では遠州流の祖と呼ばれています。そこには庶民たちの間に新しく芽生えた日本的な調和を更に深められるように指導した遠州がいました。その遠州が生けたと伝えられている拋入花（なげいれはな）の絵図が『立花訓蒙図彙（りつかくもんもうずい）』に伝えられています。



絵図には「橋柱（はしばしら）」と題が付けられ、簡単な説明文が添えられていました。説明文によると、この花器は滋賀県大津市の琵琶湖畔の瀬田川に架かる、瀬田橋の架け替えで不要となった橋杭を用いて作られたもの

て特筆してよい事柄は、五重塔の建築方法に習い、古材を独特の手法で再使用されたのです。若き遠州は身をもってその事を体験することができました。この時、臍と臍穴は適当な間合いを持たせれば大きな揺れにも倒れることはない、また、黒ずんだ古材はその表面を一分（約三ミ）ほど削り取れば、真新しい白木の木材として生まれ変わる等々、先人から受け継がれてきた知恵を身をもって体験することが出来たことは、有意義なことであつたと思われます。

関ヶ原の合戦の後、徳川家康は焼かれた伏見城の跡に自分の城を築くため、小堀新助を作事奉行に命じました。このときから遠州は父の元で建築設計に携わって行く事になりました。そのことが、晩年、ここに載せた花器を生み出すこととなったに違いありません。

或るとき、この花器を見た人が、「この花器は、人や馬に踏みつけられた、橋杭の廢材を用いて作られたと聞きました。大切なお客様を持って成すための道具としては、よろしくないのではありませんか？」と尋ねました。すると遠州は、

「例えば、仏像を彫る木材には、表面が朽ちて土塗（まみ）れになっているものを用い

ることさえあります。そのことを思えば、橋杭の廢材を用いて花器を作ったとしても、何の不都合もありません。表面を一分ほど削れば、古材は真新しいものに生まれ変わることが出来るのですよ」と、それまでの経験に基づき、先の問いに答えたとそうです。

花器には蝙蝠（こうもり）の形をした朱塗りの敷板が敷かれていました。老人などは、うるわしく美しき道具よし。侘び過ぎてはさわやかなきもの之」との利休の言葉に従い、敷かれていたのです。今でこそ、西洋文化の影響で蝙蝠は不吉な生き物だと思う方が多いかと思えます。ところが、支那の国では【蝠】【福】共に同じ発音から「福」を寓意し、【幸福】の象徴とされてきました。赤い蝙蝠は【赤福】と【洪】の発音が同じことから

【洪福（こうふく）】、更に大きな幸福をもたらす生き物だとして珍重されたのです。そのことを受けて我が国でも、お芽出度い印として用いられてきました。

遠州は、洒落（しやれ）にして華麗（かれい）、繊細にして上品なきれいきびの感覚を、茶の湯に導入した大名茶人です。この拋入花は遠州の美意識をもとに創造された「きれ

で、花器に開けられていた長方形の穴は橋杭の臍（ほぞ）を差し込む臍穴（ほぞあな）だったので。「不要と思われる物でも、見方を変えれば人に役立つ物は多々ある」、また「適当な間隔を保てば、互いに調和することができる」と言うことを、この花器の姿に込め庶民たちに示して見せたのです。

遠州の父親の新助は、文祿五年（一五九五）に秀吉の直屬となり伏見に居を移しました。そのとき遠州親子は家康と再会し、家康の大工の棟梁である中井孫太夫・正清の親子と出会いました。このことが、後に作事奉行として活躍する遠州に大きな影響を与えることとなります。作事奉行とは、現代にいう建築設計技師のこと。勿論、築城などの大きな建築工事は大工の棟梁である中井家が支配していましたが、その中であつて遠州は、建築設計技師としての地位を固めて行ったのです。

文祿五年七月、京都の街を文祿の大地震が襲いました。この大地震は東寺の講堂を倒壊させましたが、五重塔はその揺れから倒壊を免れたのです。つまり、建築構造の違いが大震災から五重塔の倒壊を守ったのです。東寺の講堂は、慶長三年（一五九八）に再建されることになりました。再建するに当たっ

「さび」のイメージに相応しく、派手やかさの趣向に満ち溢れるものでした。と共に、他と競いをもつのでなく、他を生かすことによる調和を見て取ることが出来ます。作事奉行としての遠州ならではの精神世界が、そこには表されていたと言えます。

主な参考文献 ○『立花訓蒙図彙』元禄九年、刊本。 ○『喫茶南坊録（滅後の巻）』江戸時代後期、写本。筆者蔵書

理事 会

平成二十三年度第三回理事会が十一月二十日（日）池坊短期大学第二会議室で午後二時から会長の挨拶の後、谷端副会長の司会進行で議題に沿って議事が行なわれた。出席者は会長以下十二名で、議題は①各担当者より事業報告、②創立二十周年記念事業について、③来年度の計画について（総会・大会・研究会等）④学会の名称変更について、⑤その他の五件であった。

①では会誌について、日向理事より編集会議の内容についての説明があり、十九号を来年二月頃に発行予定で編集を進めている。また新刊紹介は年四回の会報で取り上げ、書評

は会誌に掲載することになった、と報告があった。また各例会について担当者より報告がされた。更にシンポジウムの提案について、世界お茶まつり実行委員会と共催が承認された。

②の創立二十周年記念事業について、田中理事より説明があり、二〇一三年を二十周年と位置付け、出版に向けて準備を進めることとなった。また二十周年事業に関連して色々なイベントを開催して学会の活動をアピールすること等が検討された。③の来年度の計画については、東京例会が六回、東海例会が四回、金沢例会が二回開催することが決まっているが、内容等は未定であり、その他の例会の開催時期については未定とのこと。総会・大会は来年六月十六日(土)と十七日(日)に京都で開催する。会場の都合で土曜日に見学会等の催しをして、日曜日に池坊短期大学で総会・大会を開催する。また日向理事より「書評原稿についての内規」案についての説明があり、検討された。④では、学会の名称変更について意見が出され、学会の方向性を見据えて学会の根本を今後も検討していくことになった。

例 会

東京例会

(平成二十三年九月三日)

「備前焼茶入について」

下村奈穂子

壺・甕・播鉢などの日常雑器であった備前焼が、茶の湯の道具として用いられたのは一五世紀末期から一六世紀初頭にかけてで、まず水指と建水が用いられたと考えられている。しかし他窯と比較すると、茶入も早くから用いられている。茶会記で初めてあらわれる備前焼の茶入は、「備前かたつき二茶入而」という記述で、『天王寺屋会記 宗及茶湯日記 他会記』の永禄九年(一五六六)十二月十二日、武野紹鷗の息である武野宗瓦の会で用いられている。本研究では、続く十六世紀後半以降の備前焼茶入について、伝世品と文献資料及び遺跡より出土した資料によって、その変遷を明らかにした。

天正期(一五七三〜一五九二)には茶会記の記述により伝世の備前焼肩衝茶入銘布袋の存在が明らかである。そして、慶長期(一五九六〜一六一五)には唐物の肩衝茶入を写し

た端正な姿の肩衝茶入と、篋による裝飾などがみられる筒形の肩衝茶入とが存在した。そして、一七世紀中期には伊部手(表面に鉄分の多い土を塗り、焼成するとその鉄分が溶け、表面に光沢があらわれるもの)によって、肩衝以外の新しい形が登場した。

このように、十六世紀中期から十七世紀末期までの備前焼の茶入の変遷を提示することができた。今後の研究によって、焼き締めという特殊な技法で焼かれた備前焼の茶入が150年ものあいだ生産され続けた理由を明らかにしていきたい。

(平成二十三年十一月十九日)

「細川家に伝来する茶入の仕覆・挽家袋について」

小山弓弦葉

昨年度十月二日〜十二月二十六日、永青文庫において「秋季展 永青文庫の茶入展」二〇一〇年度調査をふまえて「が開催され、本展に際し細川家伝来の三十四件の茶入に附属する挽家袋・仕覆の悉皆調査が行われた。

三十四件ある茶入の内、唐津茶入二件以外は全てに仕覆が附属する。細川家の挽家袋・仕覆に用いられる裂には、大きく分けて金襴

が二十七点、緞子が二十点、間道が十三点あり、錦・更紗・綴織・風通・刺繍や唐織といった雑載も見られる。

細川家伝来の仕覆・挽家袋に見られるいわゆる名物裂は、全八十六点の内二十点で多くはない。ただ、裂の産地を概観すると中国・明時代やインドのものが圧倒的に多く、細川家の格式を示す挽家袋・仕覆の数々が揃い決して他の大名家に引けを取るものではない。江戸時代の価値観に捉われることなく、細川家独自の美意識によって仕覆が詠えられたことがうかがえる。そのような中で「瀬戸肩衝茶入 塞」に附属する仕覆・挽家袋は富田金欄や望月間道など細川家には珍しく堂々たる名物裂尽くしで、細川家伝来の中では異色の存在である。「塞」は中興名物として知られるが、幾多の持ち主を渡り行く間に正装に整えられたようにも見受けられる。

細川家の袋物には裂名を墨書した紙札が附属するものや、仕覆箱に裂名がつけられている例もあり、江戸時代に仕覆裂が実際にどのようなに称されていたかがうかがえる。その一つ「瀬戸茶入 銘白いと」に附属する仕覆には「あつき廣東」と墨書銘がしたためられ、この仕覆用に特別に桐箱が詠えられている。

現代では知られない名称であるが名物裂の一つである「あつき間道」との関連をうかがわせる。以上についての詳しい内容については茶入の調査報告もかねた図録が近々刊行される予定である。

近畿例会

(平成二十三年十月一日)

「中国の喫茶法にみる、茶を粉末化する技術、の変遷」

廣田吉崇

平成二十二年の平城遷都一三〇〇年祭記念事業の一環として開催された「天平茶会」において、唐代の製茶法・喫茶法に関する貴重な知見がえられた。とくに固形茶を粉末化した粒度について、従来から研究者は「米粒大くらいの粉末」(神田喜一郎)などのように説明している。しかし、「天平茶会」における復元の結果、それは目視によっても、計測結果によっても必ずしも正しくないことが明らかとなった。

そもそも唐代・宋代を通じて、固形茶は粉末化して飲用されてきた。ただし、唐代は湯に投じて煮出す方法(粉末煮出法)、宋代は湯を注いで懸濁する方法(粉末懸濁法)との

ちがいがあある。茶を粉末化する方法は、「臼(つきうす)」、「碾(茶研)」、「磨(茶臼)」と変遷した。研究者は、宋代になると茶の粒度が当然に細かくなると理解している。その理由として『茶経』の「碾(茶研)」、「磨(茶臼)」が木製であるのに対して、宋代の文献では金属製とされていること、また、「磨(茶臼)」が登場することをあげている。しかし、文献資料、絵画資料によるならば、「磨(茶臼)」が十一世紀中頃には用いられたにもかかわらず、そのうち「碾(茶研)」がすたれてしまったわけではない。両者が併存していた状況、あるいは「碾(茶研)」優位といえる状況が十三世紀後半の南宋期末まで継続した。

これらの事実からは、宋代の「磨(茶臼)」はそれほど精巧なものではなく、そして、唐代も宋代も茶の粉末の状態に大きなちがいはなかったことが推測される。

例会の「案内」

東京例会

一月二十一日(土) (会場: 東洋英和大学大学院 午後二時)

「豊臣秀吉の吉野の花見と、吉野花見図屏風」 三宅秀和氏

「茶の湯と昭和初期日本におけるデザイン運動」 細谷 誠氏

静岡例会

一月二十八日(土) (会場：静岡県男女共同

参画センター「あざれあ」

午後一時半〜)

「竹川竹斎と静岡」

岩田澄子氏

「江戸時代の静岡の茶」

中村羊一郎氏

静岡県男女共同参画センター(静岡市

駿河区馬淵一丁目十七の一、静岡駅か

ら国道一号线沿いに西へ徒歩約九分)

近畿例会

一月二十一日(土) (会場：近畿地方発明

センター会議室B 午後二時〜)

京都市左京区吉田河原町一四

(川端通東一条通下ル)

「大燈国師墨蹟について」 官武慶之氏

「数奇の風体、善き「そそう」について」

朴 珉廷氏

北陸例会 (会場：未定)

三月三十一日(土)

「未定」

未定

高知例会 (会場：高知県立文学館慶雲庵茶室

午前十時〜)

二月十二日(日)

「石州流三百ヶ条不白答(上)常用文」

柏井 武氏

一般の方々が茶の湯に親しんでもらうため
の茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時〜十六時まで

開催予定日 高知新聞伝言板に掲示

(会費二百円)

二十四年度大会発表者の募集

平成二十四年度の大会は六月十七日(日)に

京都市の池坊短期大学で行なわれます。

学会事務局では大会の発表者を募集してお

ります。申込は八〇〇字程度の要旨を添えて

ください。最終締切は一月末ですが、予定人

数に達した場合にはその時点で締め切ります。

奮ってご応募下さい。詳しくは学会事務局

までお問い合わせ下さい。

お知らせ

*前号巻頭文の訂正

前号の倉澤行洋氏の巻頭文の本文中に四箇所の誤記がありました。

二頁の中段十六行目と下段二行目・三行目・五行目の「円」を「圓」に訂正させていただきます。

*新刊紹介

① 『伝利休茶室とその周辺―復原された松江最古の茶室―』

今年三月に開館した松江歴史館に再建され

た「利休の茶室」の詳細を著述した一冊。

米子工業高等専門学校名誉教授 和田嘉宥著

ハーベスト出版 (定価一三〇〇円+税)

② 『籠と竹のよもやまばなし』

「竹」を見つめ直し、その歴史や扱われ方などを再考察しつつ、著者の思い出話などを交

えながらエッセイ風にまとめた短編集。

竹芸家 池田瓢阿著

淡交社 (定価二五〇〇円+税)

*年会費を未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みください。よろしくお願いいたします。